

筑後川下流域の神社奉納物によるローカル地域の見方

Viewpoints of Local Area Focused on Votive Offerings of Shrine in the Lower Reaches of the Chikugo River

黒 木 貴 一

Takahito KUROKI

福岡教育大学
社会科教育ユニット

杉 村 伸 二

Shinji SUGIMURA

福岡教育大学
社会科教育ユニット

(令和2年3月23日受付, 令和2年12月10日受理)

抄 録

筑後川下流域の神社の奉納物を中心に, ローカル地域の現状を確認する手法を検討した。神社空間はこれまで, 神門, 猿田彦神や国威発揚の石碑などの奉納にあるように, 仏教, 地域信仰や国策等の影響を受けつつ長期に景観変化を続けてきた。その結果, 神社は比較的安全な場所に立地することが多くなり, 奉納物の属性, 材質, 奉納年から見て時空間的な偏在性が生まれた。しかし第二次世界大戦以降は, その変化要因が減失したため, 奉納物の管理に止まらず更新も難しくなったことで風化が進行し, 奉納物数の減少や奉納物材の変化が現れている。この結果, 奉納物の更新要因として, かえって自然災害の割合が増した。これは文書記録が残りにくい自然災害の範囲を推定する災害情報源として奉納物の有用性が高まったことを意味する。さらに神社空間は, 信仰機能に加え, 公民館や公園機能が付加し始めたことも確認した。まとめると奉納物の属性及び時空間的な地理情報解析では, 神社の現状に止まらず, 空間を維持させるための人々の努力や工夫, すなわち持続可能性を確認することができる。

キーワード: 神社, ローカル地域, 奉納物, 自然災害, 持続可能性

1. はじめに

地域社会の持続可能性は, 財政や人口の減少, インフラの脆弱化に課題を持つという認識¹⁾があり, その状況を時空間的に把握し解決を試みることは地理学の役割である。現在, 持続可能な地球社会の実現を目指す国際共同研究のプラットフォーム(Future Earth)に対し, 日本でも持続可能な開発目標(SDGs)を見据えた様々な取り組みがなされている²⁾。たとえば「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し, 持続可能な形で利用する」³⁾に関わる漂着ゴミに関し, 20年にわたりローカルな課題を扱いつつもグローバルな海洋循環の一部という視点を持つ教育活動を試みた⁴⁾。そこでは漂着ゴミの時空間的な特徴を

明らかにしたが, 河川を通じて地域社会から海岸に漂着するまでの過程, すなわちローカルな視点を持ち地域の状態を見極める課題が残された。本研究では筑後川下流域の内陸部で, 財政・人口等ではなく文化の顕現である神社を取り上げ, ローカル地域の状態を評価する指標を探る。

神社の継続は, 地域社会の財政・人口等以外に, その場所に生じる自然現象にも影響される。神社は伊能図や地形図に200年以上もほぼ同じ地図記号で記載される文化景観であり, その場所は自然災害に対し比較的安全とされる。たとえば2011年東北地方太平洋沖地震での津波^{5), 6), 7)}に対し, 2017年九州北部豪雨で山地域の斜面災害⁸⁾に対し安全な地形条件が紹介された。しかし今

日、著名な神社を除き、社叢林の伐採、奉納物材の変化、狛犬等神社構成物の風化、敷地縮小、祭事の停止など継続が困難なことを示す兆候が見られる。たとえば石材の奉納物は更新がないまま風化が進み⁹⁾、伝えるべき文字の判読も困難となろう。また津波や豪雨の規模により被災する神社もあろう。この現状は、日本文化消失はもとよりそこに伝えられた自然災害の痕跡が消失し、神社が本来持つ自然災害に対して安全という空間認識も弱まるローカル地域の持続可能性が低下していることを意味する。そこで本研究では、筑後川下流域の神社及びその奉納物並びにその付属施設を対象とし、特に石材等の硬い奉納物等の特徴を調査し地域の状態を観察した。その結果を時空間的に展開し、神社の本質的な価値を検討した。本稿はその検討結果概要を報告する。

2. 研究方法

筑後川下流域の福岡県側で、昭和28年の浸水範囲¹⁰⁾に重なる朝倉市から柳川市までの範囲を対象に139社に対し、計1940奉納物を調査した。調査項目は神社名称、地形、奉納物（種類、材質、奉納年、記載内容や状態）、本殿や拝殿以外の付属施設とした。地形は、自然堤防、沖積低地、旧河道、段丘、泥州、人工盛土とした。奉納物の種類は、幟杵石、鳥居、手水舎、灯籠、狛犬、石碑、その他とした。幟杵石、灯籠、狛犬は対を1単位（個）として記録した。石碑では、祭祀、戦争関連の祈願、旅や長寿への感謝、偉人の顕彰、御霊の鎮魂、奉納の記録に関わるものを中心である。その他では、戎、猿田彦神、撫牛、祠、注連柱、花生け、玉垣、石橋、幟ポール等がある。材質は、溶結凝灰岩、溶結凝灰岩（黒）、花崗岩、花崗岩（黒）、変成岩、凝灰質砂岩、コンクリート、金属（鉄、銅、ステンレス他）、その他とした。奉納年の和暦や皇紀は西暦に換算した。西暦換算は、ホームページ「こよみのページ」^{a)}と「まめ辞典」^{b)}を参照した。付属施設として神門、公民館、公園、ゴミ集積所等の有無を確認した。

各神社及び奉納物のデータベースはExcelで作成し、地理情報解析はQGIS3.4で進めた。

3. 神社情報の基礎集計

3.1 神社名の分布

神社名は、社地内に合祀された神社を除き、主な名称を記録した。ただ同じ祭神を持ちながら近似する名称のものが多種あり、名称系統で再整理

した。たとえば菅原道真に所縁のある天満系では天満宮35社、天満神社6社、天神社3社、満宮1社、八満宮1社のため、計46社と計上した。次いで八幡系10社、海童系10社、三嶋系6社、老松系4社、玉垂系4社、龍神宮系3社、住吉系3社、若宮系3社を確認した（表1）。神社の一般向け紹介¹¹⁾によれば、天満系（原文では天神社）は、菅原道真の祟りを鎮めるための北野神社の保護下に、地方の嵐の神や雷の神を祀る神社が加わり天神社になったとされる。八幡系（原文では八幡神社）の八幡は船に多くの大漁旗が立つ様を示し、元々祀られていたのは海神とされる。ただ武士の時代に国家鎮護や家運隆昌をもたらし神様とされた。同書によれば、全国で八幡系は天満系に比べ社数約1.5倍とされるが、研究対象地域では天満系が八幡系の約5倍もある。これは大宰府を擁する福岡ならではの高比率を示すと思われる。これらの神社系統の名称分布を図1に示す。数の多い天満系、八幡系は全体に分散しており、大宰

表1 神社の系統と数

系統	総数	神社名と数				
天満	46	天満宮35	天満6	天3	満宮1	八満宮1
八幡	10	八幡4	八幡宮4	八幡社1	産八幡宮1	
海童	10	海童9	海津見1			
三嶋	6	三嶋4	三島1	三島宮1		
老松	4	老松2	老松宮2			
玉垂	4	玉垂2	玉垂命1	玉垂宮1		
龍神宮	3					
住吉	3	住吉2	住吉宮1			
若宮	3	若宮2	若宮八幡宮1			

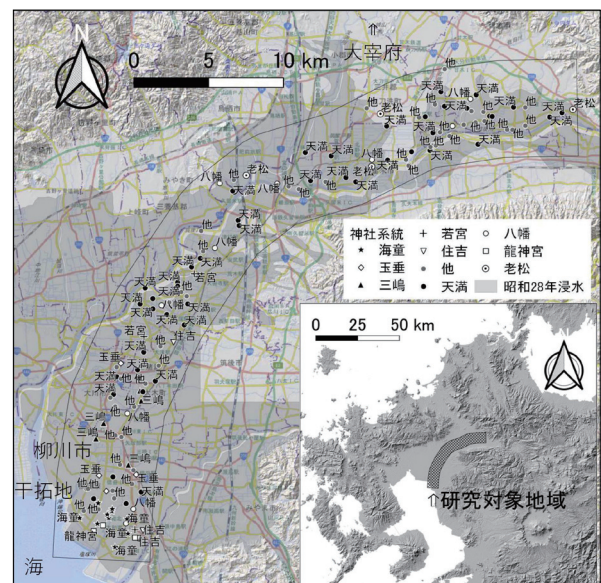


図1 神社系統の分布
背景は地理院地図を利用した。

府や海への距離による分布のばらつきはない。しかし海童系、龍神宮系は海岸付近に集中する。地理院地図の治水地形分類図によれば、そこは干拓地にあたり、人々と海との関りをうかがわせる。また三嶋系は柳川市を中心に分布する。

このように神社名称は、出現頻度は全国傾向に似るが、一部に地域的遍在性を確認できた。

3. 2 神社の立地する地形

本殿位置に関し地形を確認し集計した。神社数は、段丘 10 社、自然堤防 66 社、泥州 4 社、人工盛土 19 社であり、周囲に比べ高い地形に立地する神社が全体の約 71% を占める。また沖積低地 39 社、旧河道 1 社である。図 2 にその地形別に神社分布を示す。沖積低地立地は、海岸に近い場所で行われる筑後川のクリーク地帯に集中し、海から遠い内陸では自然堤防立地が多くなる。これは洪水の水位変化が大きい上流で、自然堤防が積極活用され、海岸付近ではその水位変化が比較的小さくなることが背景にあると思われる。ただ、より海岸に近い地域では人工盛土立地が多くあり、これは洪水以上に潮汐の水位変化を考慮する工夫になったと考えられる。また人工盛土立地は干拓地に多い。

このように神社は洪水や高潮に対しその水位変化を考慮し比較的安全な地形を求め立地する傾向が認められる。

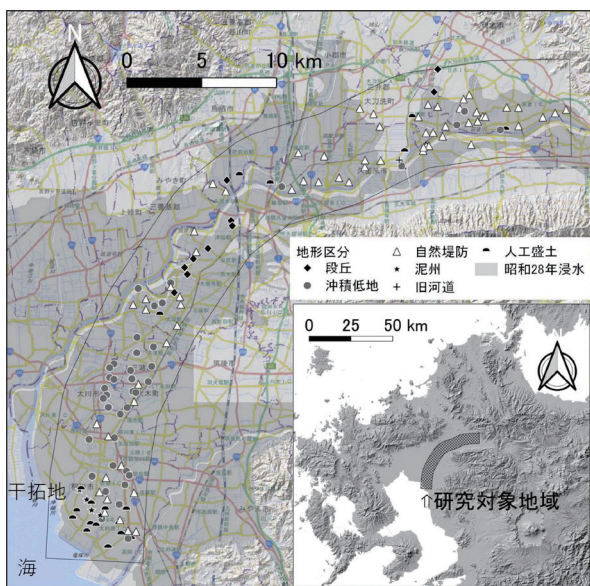


図 2 神社の立地する地形
背景は地理院地図を利用した。

4. 奉納物調査の結果

4. 1 代表的な奉納物

表 2 の(1)は代表的な奉納物（写真 1 (1)-(6)）の集計結果を示す。石碑 365 個が最も多く、次いで灯籠 330 個、幟杵石 213 個、狛犬 187 個、鳥居 184 個、手水舎 164 個であり、神社に時期を置いて複数奉納されていることが一般的である。石碑では戦争・軍関係のものが多く 29 社で約 60 個確認された。奉納年は 1897 ~ 2001 年にある。第二次世界大戦前では日清、日露戦争関係のものが多く、戦後は忠霊塔や忠魂碑が大半となる。それ以外では、伊勢参宮、長寿記念、寄附人名の感謝の奉納物が目立つ。

神社景観で通常思い浮かぶ以外の奉納物、その他 497 個は石碑数を上回っている。その代表的な物を確認できた神社数で示せば、戎は 23 社、猿

表 2 奉納物調査の集計結果

(1)奉納物 単位：個							
幟杵石	鳥居	手水舎	灯籠	狛犬	石碑	その他	
213	184	164	330	187	365	497	
(2)材質 単位：個							
溶結凝灰岩	溶結凝灰岩(黒)	花崗岩	花崗岩(黒)	変成岩	凝灰質砂岩	コクリト	金属
1192	103	350	20	55	72	83	46
(3)奉納年(年～年) 単位：個							
1530-1750	1751-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	1951-2000	2001_	不明
44	74	129	291	671	331	92	308



写真 1 代表的な奉納物

(1) 中の原田は地名、弓頭は神社名、6桁の数字は調査年月日であり、19が西暦下2桁、02が月、05が日を示す。この表記は以降の写真でも共通。

田彦神は20社、撫牛は16社である（写真2(1)~(3)）。戎は、蛭子、恵比寿とも記載され、元々豊漁や航海安全の神様でその後、商売繁盛や金運をもたらす福の神となった¹¹⁾、両手に釣り竿と鯛を抱えて微笑む約50cmの座像である。奉納年は1796年～1895年である。戎の釣り竿は既に失われ、それを設置した穴が痕跡として残ることが多い。神社の鳥居付近に設置され、1神社に複数奉



写真2 その他の奉納物

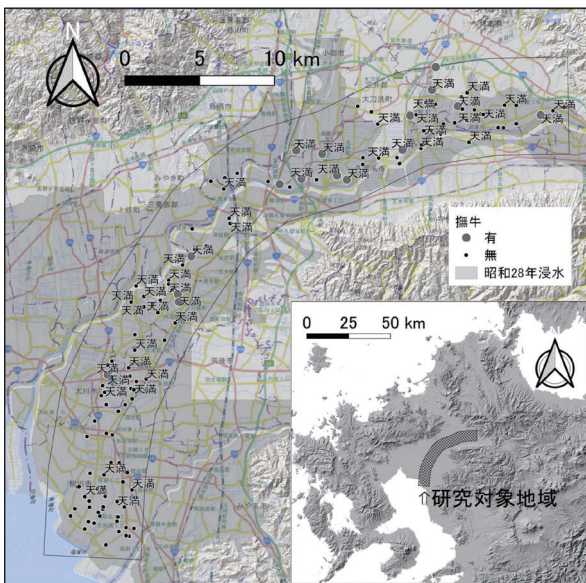


図3 撫牛と天満系神社
背景は地理院地図を利用した。

納される場合（片の瀬1_祇園、宮ノ陣2_宮陣など）もあるが、神社外の路傍に単独で見かけることもある。猿田彦神は旅人の安全を守る神様で、古くから道の傍に神聖な石を置き道祖神と考える風習と合わさった¹¹⁾。奉納年は1634年～1930年である。「猿田彦大神」と文字の掘られた高さ1m前後の巨礫が多いが、神社の鳥居付近あるいは縁部に設置され、1神社に複数奉納される場合（西入地_福成、長門石4_八幡）もある。神社外の細い路地の傍に単独にある状況も確認した（上金丸_八幡宮）。猿田彦神は戎とともに、道路拡張で神社内に移設されたものが多いと考えられる。撫牛は、撫でると縁起が良くなるという信仰により奉納された牛像で、菅原道真と牛の縁故から、本稿での天満系神社にあるとされる¹²⁾。撫牛は子牛程度の大きさの置物で、奉納年は、1877年～2003年にある。角や尾の破壊が生じ補修されず、風化の激しいものが多い。図3は撫牛のある神社を示す。撫牛は、天満系に多い傾向はあるが必ずしも奉納されておらず、他系の神社にもある。またその神社は研究対象地域の上流域に多くあり下流域にはほとんど見られず偏在性がある。撫牛の他に、馬（上弓削_法皇宮、南野_八幡宮）と鳥（壱町原_天満宮、中木室西_天満宮）の生物の奉納物も確認された。奉納物の分布状況に関してはその歴史的背景について今後の検討を要する。

このように神社は基本的な奉納物は定常的に、猿田彦神や国威発揚の石碑などが、ある特定の期間に奉納され、今日まで地域信仰や国策の影響を受けつつ景観変化を続けてきた。またその奉納物は時空間的な偏在性を持つ場合が多く認められる。

4.2 附属施設

神社の附属施設として神門、公民館等に関し奉納物として扱い調査結果を整理する（写真3）。柳川市付近では、鳥居と拝殿の間に神門（楼門）（写真3(1)）を持つ神社を34社確認したが、木



写真3 附属施設

造のため奉納年は不明である。神門には弓や刀を持ち神様を守護する随(神)身(写真3(2))が対で備わり、それらに狛犬あるいは戎が備わる。寺院には神門に形状が似る山門や楼門が多く備わっているが、明治維新时期に行われた神仏分離政策以前には長い神仏習合の歴史があったことから、神門は仏教の影響を受けていることを伺わせる^{注1)}。神門及び隨身等は近年更新された物から破損が著しい物まで状態差が大きく、管理状況は神社別に様々であると思われる。公民館は指定避難所にも使用されることがある¹³⁾。調査では神社40社に公民館併設(名称として農業研究所、構造改善センターも含む)を確認した。社務所併設に似た景観としてあり、社務所機能が転用された印象の強いものもある。公民館建設を示す石碑に1955年(昭和30年;藤吉_若宮八幡宮), 1987年(昭和62年;三条_玉垂宮), 1993年(平成5年;鷗木西_天, 2002年(平成14年;藤吉_風浪)の記載があり、昭和時代から公民館併設が始まっていることが確認できた。公民館併設ではなく、拝殿が公民館化した神社(写真3(3);四丁開_海童)もあった。それ以外にも神社には遊具を備えた公園, グランドゴルフ場, ゴミ集積場がよく設置されており, 神社が現代社会に溶け込み継続されている状況を良く観察できた。

このように神社は仏教との関りや地域の社会構造の影響を受けつつ, 景観変化を続けてきた。

4. 3 奉納物の材質

表2の(2)は奉納物の材質の集計結果を示す。溶結凝灰岩1192個が最も多く, 次いで花崗岩350個, 溶結凝灰岩(黒)103個, コンクリート83個, 凝灰質砂岩72個, 変成岩55個, 金属46個, 花崗岩(黒)20個, その他19個である。奉納年では溶結凝灰岩が1615年~2008年, 花崗岩が1870年~2018年, 花崗岩(黒)が1948年~2016年, 溶結凝灰岩(黒)が1530年~2017年, コンクリートが1915年~2015年, 凝灰質砂岩が1808年~1985年, 変成岩が1668年~1993年, 金属が1960年~2019年, 花崗岩(黒), その他が1781年~2019年である。奉納の開始及び最終年は, 各材質で比較的大きい差がある。これは実際の奉納年の相違とともに奉納年記載の風化による劣化と損失も考慮する必要がある。

奉納物材は日射, 乾湿, 塩類析出による膨張収縮の物理的風化が卓越し, 時間経過とともに文字の判読が難しくなる。溶結凝灰岩は, 細粒の構成

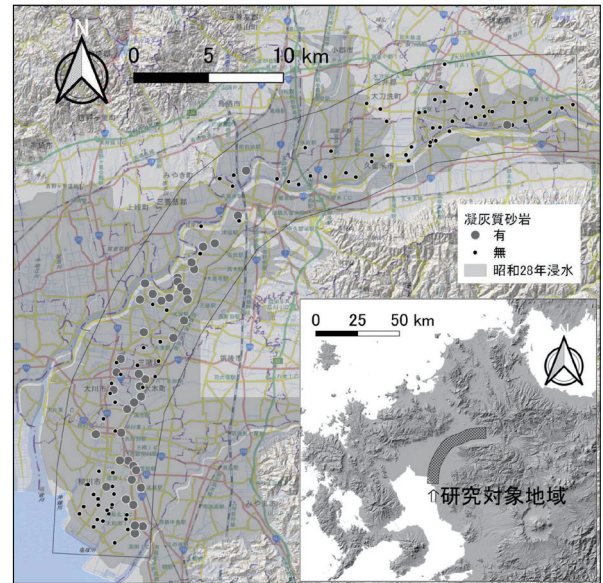


図4 凝灰質砂岩の奉納物
背景は地理院地図を利用した。

粒子が表面より脱落し, 文字が不鮮明化していく。さらに表面の蘚苔類付着も多く風化を早めている。溶結凝灰岩(黒)は, 溶結凝灰岩より粒子が細かく溶結度が高いため, 風化速度が比較的遅い。花崗岩は粗粒の構成粒子の結合が弱まりマサ化し, 文字が不鮮明化していく。花崗岩(黒)は, 花崗岩より粒子が細かく, 新しい時期のものが多いため風化はほとんど進んでいない。変成岩は片理を境に表面が板状に剥離し文字全体が消失する。凝灰質砂岩は, 表面から数cm深に亀裂が生じ, それを境に表層が板状に剥離し文字全体が消失する。加えて溶結凝灰岩のように表面の文字の不鮮明化も加わる。コンクリートは, 亀裂, 剥離, 溶解により変状が進み文字が不鮮明化していく。なおコンクリート奉納物の幟杵石(19個)と鳥居(13個)が, 粗砂あるいはマサを表面に張り付け花崗岩様にする形式をとることが多い。ここで一例として, 出現頻度の低い凝灰質砂岩の奉納物が見られた神社43社の分布を示す(図4)。その神社は研究対象地域の下流域に集中し上流域にはほとんど見られない。また下流域でも特に干拓地にはほとんど見られない。他の材質も含め, その分布状況に関しては, 地質と流通とを念頭に今後の検討を要する。

このように, 奉納物の材質は, 時空間的な偏在性を持つ場合が認められる。

4. 4 奉納物の期間

表2の(3)は奉納物の50年間をまとめた期間

別の合計個数を示す。1530年から1750年は44個、1751年～1800年は74個、1801年～1850年は129個、1851年～1900年は291個、1901年～1950年は671個、1951年～2000年は331個、2001年以降は92個、不明は308個である。1901年～1950年が最も多い。1900年以前の各期間の個数は古い程減少するが、これは風化による不明個数の増加あるいは破損による廃棄が要因と思われる。ところが1951年～2000年は時代が新しいにも関わらず個数が減少した。さらに50年の4割の時間が経過した2001年以降の奉納物は僅か92個で、331個の4割に届かず少なく、奉納物数の激減は明白である。日本の1901年～1950年は、日露戦争と第二次世界大戦が起きた時期と重なり、1894年は日清戦争も起きた。この期間は戦争に対し国威発揚が様々に行われ、既述のように神社では戦争・軍関係の石碑の奉納が増し奉納物数を押し上げている。このため終戦により神社のその利用目的が消失し奉納物数の減少につながったことが、激減の背景として明らかである。ただ奉納物数の減少速度は、風化や破損を想定したとしても急で、その背景をさらに追究する必要がある。今回の調査では1700年以前の古い奉納物が10個確認され、うち柳川市本村の三嶋神社の溶結凝灰岩による鳥居は元和元年（1615年）に奉納された（写真4）。鳥居は本殿から約200m西にある低地のクリークに接する位置にある。その状態は良好だが説明用の看板は朽ち果て、鳥居と本殿を結ぶ参道は一般道路で分断されており、周囲は雑草に覆われている。極めて古い時代の貴重な遺産であるにも関わらず、設置された場所の環境及び状態が決して良くないことは、奉納物数の激減の背景を追究する上で重要な事実となろう。

このように奉納物個数の期間変化から、奉納物



写真4 三嶋神社の鳥居付近景観

数やその維持・管理は、歴史的な影響が強く反映されていることが分かった。

5. 奉納物からみた地域の状態

5. 1 材質と奉納期間からの見方

表3は材質別に見た奉納期間別の奉納物数割合である。溶結凝灰岩は、最も割合が高い期間は1901年～1950年であり、次いで1851年～1900年、1951年から2000年である。2001年以降はほとんど奉納が確認されない。溶結凝灰岩（黒）は、最も割合が高い期間は1901年～1950年であり、次いで1851年～1900年、1801年から1850年である。1951年以降に奉納が急減する。花崗岩は、最も割合が高い期間は1901年～1950年であり、次いで1951年～2000年、2001年以降である。1850年以前は確認されず、1901年以降に奉納が急増する。花崗岩（黒）は、最も割合が高い期間は1951年～2000年であり、次いで2001年以降である。1900年以前は確認されない。変成岩は、最も割合が高い期間は1901年～1950年であり、次いで1951年から2000年、1851年～1900年である。2001年以降は奉納が無い。溶結凝灰岩の割合変化と似ている。凝灰質砂岩は、最も割合が高い期間は1851年～1900年であり、次

表3 材質別奉納物数の奉納期間別割合

	期間(年～年)							
	1530-1750	1751-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	1951-2000	2001_	不明
溶結凝灰岩	3.1	5.7	9.1	18.6	37.2	11.2	0.5	14.7
溶結凝灰岩(黒)	4.9	4.9	14.6	18.4	31.1	6.8	2.9	16.5
花崗岩	0	0	0	2.9	37.1	32.6	15.4	12
花崗岩(黒)	0	0	0	0	5	70	25	0
変成岩	3.6	0	0	12.7	50.9	14.5	0	18.2
凝灰質砂岩	0	0	8.3	45.8	15.3	2.8	0	27.8
コケ	0	0	0	0	30.1	32.5	2.4	34.9
金属	0	0	0	0	0	50	30.4	19.6
その他	0	5.3	0	0	5.3	15.8	42.1	31.6

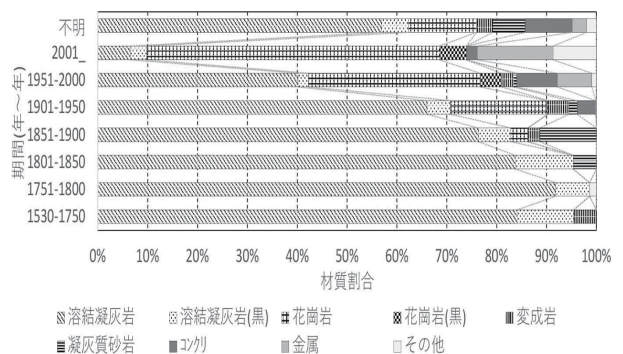


図5 奉納期間別奉納物数の材質別割合

いで1901年～1950年, 1801年～1850年である。1800年以前と2001年以降は確認されない。コンクリートは, 最も割合が高い期間は1951年～2000年であり, 次いで1901年～1950年である。1900年以前は確認されない。1901年以降に奉納が突然始まるものの, 全体は花崗岩の割合変化と似ている。金属は, 最も割合が高い期間は1951年～2000年であり, 次いで2001年以降である。1950年以前は確認されない。プラスチックや陶器を含むその他は, 1901年以降漸増し, 2001年以降に最も多くなる。

図5は奉納期間からみた材質割合である。1530年以降1950年までは, 溶結凝灰岩が50%以上の圧倒的割合を占めるが徐々に割合は低下する。2001年以降は10%を下回った。逆に, 花崗岩の割合は1851年以降漸増し, 2001年以降は約56%を占めるまでに増え, 溶結凝灰岩の割合を越した。溶結凝灰岩(黒)は1530年以降1850年までは10%前後奉納されているが, その後は漸減した。花崗岩(黒)は1951年以降に5%前後奉納されている。変成岩は, 各期間で0%あるいは5%以下しかない。凝灰質砂岩は1801年以降に増加し, 1851年～1900年に最も割合が高まり約11%に達したが1901年以降は急減した。金属は, 1951年以降に増加し, 2001年以降は約15%に達した。コンクリートは1901年以降に増加し, 1951年～2000年に約8%だったが, 2001年以降は減少した。その他は, 2001年以降に約9%と多い。たとえば通常, 祭時に花崗岩と溶結凝灰岩による幟杵石に竹を据え付けるが, 調査ではステンレスやアルミのポールが金属幟として常時設置される神社が36社(全体の約26%)も確認された。幟杵石もコンクリートや鉄に変更された神社も24社あった。これは調査対象地域で竹を使用する生活が失われ竹林の管理が変化し, また竹林が減少したことが背景にあると思われる。

このように奉納物の材質別に奉納の盛んな時期が異なり, また1901年～1950年の前後で奉納頻度の急減や急増が見られる。加えて第二次世界大戦の終戦1945年を境に, 奉納物の材質の急変がある。この奉納目的の弱まりは, 土地利用を含む社会構造の変化も加わって, 奉納物の管理や更新を難しくし, 奉納物数の減少や奉納物材の変化として顕在化した。

5. 2 奉納年と自然災害からの見方

図6は奉納物数の経年変化を示す。現在～1700年までは年毎とし, それ以前は奉納の無い

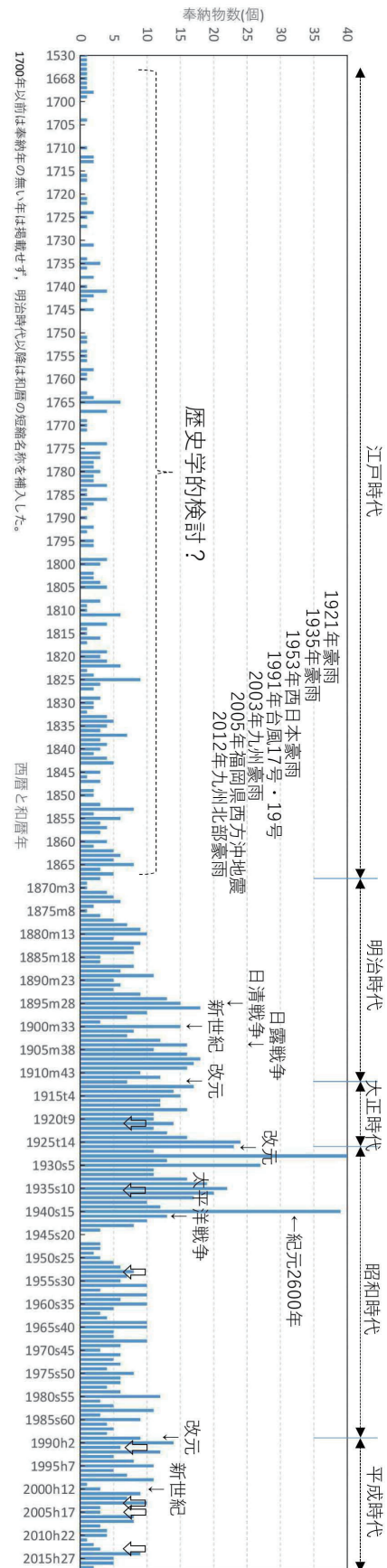


図6 奉納物数の経年変化

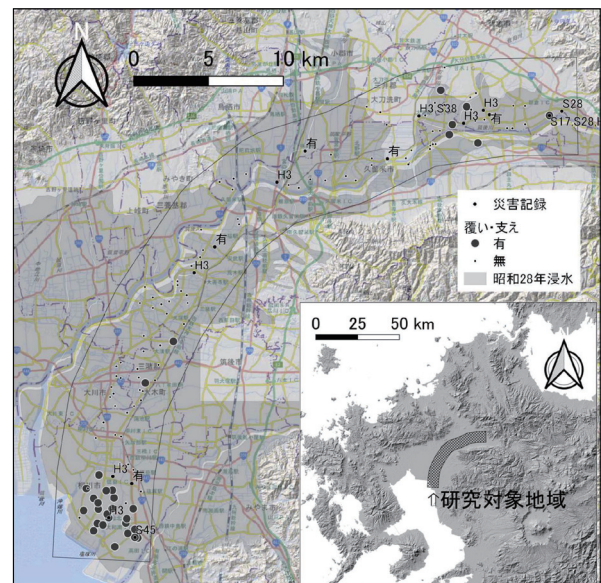


写真5 1991年台風19号の修理記録

年が多いため、奉納された年の個数を順次配列した。明治時代以降は西暦後に和暦の頭文字 m, t, s, h と年を付した。日清戦争が1894年（明治27年）、日露戦争が1904年（明治37年）に起こった。太平洋戦争は1941年（昭和16年）に始まり、1945年（昭和20年）に終戦となった。この戦争が続く時期に毎年10個以上の奉納が継続しており、際立って奉納物の多い期間となっている。また改元では1912年（大正元年）、1926年（昭和元年）、1989年（平成元年）と夫々後数年以内に奉納物数が増加する。実際「御大典」と記載された石碑24個を確認した。また紀元2600年（昭和15年）を祝う石碑は9個確認したが、その記載はないものを含め1940年は39個も奉納されている。

これらの歴史的な出来事に伴う奉納物増加を除くときに、歴史では説明できない奉納物の増加する時期が現れる。たとえば2014年頃や1955年頃である。そこで文献^{10), 14)}から、研究対象地域に生じた比較的大規模な自然災害を抽出した。それらは1921年豪雨、1935年豪雨、1953年西日本豪雨、1991年台風17号・19号、2003年九州豪雨、2005年福岡県西方沖地震、2012年九州北部豪雨である。図6には自然災害の発生年に矢印を付したが、各年とその数年後までの間、奉納物数の増加が認められる。増加年の後年への継続は、被災後に氏子による修復のための寄附が集まるまでの時差と考えられる。ただ戦争が続く時期で神社が国威発揚に活用された時期は、そのバックグラウンドが大きく、自然災害に起因する奉納物増を捉えることは難しい。

1991年台風19号は強風を伴って日本を縦断し、青森県では多くの林檎被害が出たため「りんご台風」とも呼ばれる。研究対象地域の周辺でも、その強風による水稻被害の生じたことが報告されている¹⁵⁾。調査では場所によって台風被害を被ったことを示す奉納物が散見された。写真5

図7 修理記録と覆い・支え
背景は地理院地図を利用した。

は1991年台風19号の修理記録を確認した事例である。(1)は下長田の山王宮の鳥居に刻まれた修理記録、(2)は田中の天満神社の石碑に記された修理記録、(3)は城戸1の海童神社の覆いとそこに裏書きされた修理記録である。これらを含めて被害要因の分かる（分からない）修理記録の残る奉納物が15個確認された。神社を強風から守る補強は、写真5の(3)のように覆いや金属支えを備える型があり、両者合わせて31社が確認された。そこで図7に奉納物に修理記録を持つ神社と覆い・支えを持つ神社とを重ねた。覆い・支えを持つ神社は、研究対象地域の最上流部と最下流部に偏在しているが、そこに1991年（平成3年）の災害記録を持つ奉納物が良く重なる。この事実は神社の奉納物調査から、自然災害の生じた範囲を推定できる可能性を示している。

このように戦争の続く時期は不明瞭ながら、終戦後は奉納物の更新要因の一つに自然災害の割合

が大きいことが分かった。また奉納物に残る災害情報の活用で、文書記録に残りにくい自然災害の生じた範囲を推定できる可能性がある。なお、江戸時代にも1740年頃、1780年頃、1830年から1840年頃、1865年頃など、奉納物数の増加する期間がいくつか認められる。今後は、過去の自然災害、たとえば1828年シーボルト台風¹⁶⁾や1792年島原大変¹⁷⁾等の北部九州での影響範囲を確認し、奉納物による災害記録の掘り起こしの可能性を探りたい。

6. まとめ

筑後川下流域にある神社139社の1940奉納物を調査し、ローカル地域の現状を確認する手法を検討した結果、以下の成果を得た。

- 1) 神社名称の出現頻度は全国傾向と似るが、一部神社は地域的遍在性を持つ。また洪水や高潮に対し比較的安全な地形に立地する傾向が認められる。
- 2) 神社空間は基本的な奉納物とともに、神門、猿田彦神や国威発揚の石碑などの奉納にあるように、今日まで仏教、地域信仰、国策等の影響を受けつつ長期にわたり景観変化を続けてきた。
- 3) 神社空間は、信仰機能に加え、公民館や公園機能が近年付加し始めた。
- 4) 奉納物は、その属性、材質、奉納年から見て時空間的な偏在性を持つ。
- 5) 奉納物の材質別に奉納の盛んな時期が異なり、また1901年～1950年の前後で奉納頻度の急減や急増が見られる。またその頃に奉納物の材質が変化する。
- 6) 第二次世界大戦の終戦を境に、奉納目的が弱まり、土地利用を含む社会構造の変化も進んだため、奉納物の管理や更新が難しくなり、奉納物数の減少や奉納物材の変化が顕在化した。
- 7) 終戦を境に、奉納物の更新要因に占める自然災害の割合が大きくなったため、奉納物の災害情報は自然災害の範囲を推定する手段となる可能性がある。

このように、奉納物の属性及び時空間的な地理情報解析を通じて、神社の現状に止まらず、空間を維持させるための人々の努力や工夫、すなわち持続可能性の状況を確認できた。

注1) 調査した神社9社で仏像の彫られた石碑やその他の奉納物が確認されている。

謝辞

本研究の遂行にあたり科学研究費の基盤研究(C)「未離水面認定の再検討と高精度化に関する評価・展開(研究代表者:黒木貴一)」及び基盤研究(B)「120年雨量データベース構築と地理空間情報の統合化による水害常襲地のリスク評価(研究代表者:山本晴彦)」を利用した。現地調査では、西南学院大学名誉教授の磯望先生に支援いただいた。柳川市の神社形式に関しては志学館大学の宗先生に助言いただいた。記して謝意を表す。本報告は76社による調査報告¹⁸⁾に、範囲を拡大した調査結果を加えてまとめた。

参考文献

- 1) 勢一智子(2018):地域社会の持続可能性について. 地方自治法施行七十周年記念自治論文集, 241-254.
- 2) 花木啓介(2016):フューチャーアースプログラムの最近の進展. 第8期環境エネルギー科学技術委員会(第7回)配付資料, 資料2. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/075/shiryo/_icsFiles/afiledfile/2016/12/02/1379909_02.pdf (2020年2月28日閲覧)
- 3) 環境省(2018):すべての企業が持続的に発展するためにー持続可能な開発目標(SDGs)活用ガイドー. <https://www.env.go.jp/policy/SDGsguide-siryu.rev.pdf> (2020年2月28日閲覧)
- 4) 黒木貴一(2020):宗像市の海浜における漂着ゴミの調査と展開. 福岡教育大学紀要, 第69号, 第6分冊, 1-8.
- 5) 宇多高明・三波俊郎・星上幸良・酒井和也(2012):2011年大津波の災害と被災を免れた神社. 土木学会論文集B3, 68-2, I_43-I_48.
- 6) 遠藤賢也・マゼレオ みほ(2015):宮城県南三陸町における神社の立地特性の把握とその歴史的背景に関する考察. ランドスケープ研究, 78-5, 693-696.
- 7) 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄(2012):東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究. 土木学会論文集F6(安全問題), 68-2, I_167-I_174.
- 8) 黒木貴一・品川俊介(2018):2017年九州北部豪雨で災害を免れた神社の地形条件. 2018年秋季学術大会日本地理学会発表要旨集, 94, p88.

- 9) 松倉公憲・高屋康彦・小口千明 (2002) : 光明寺墓石外柵に使用された花崗岩の風化について. 筑波大学陸域環境研究センター報告, 2, 31-36.
- 10) 国土交通省九州地方整備局・国土交通省国土地理院 (2002) : 九州地方の古地理に関する調査, 古の文化と豊かな自然. 165p.
- 11) 武光誠 (2007) : 知っておきたい日本の神様. 角川ソフィア文庫, 218p.
- 12) 茶圓直人 (2019) : 撫牛の初出と展開. 日本語・日本文化研究, 29, 350-359.
- 13) 黒木貴一・岩船昌起 (2020) : 地形及び地形量指標による避難所立地の安全性評価. 日本地理学会発表要旨集, 97, 291p.
- 14) 一般社団法人九州地域づくり協会 (2014) : 年表から探る福岡県, 九州災害履歴情報データベース. <http://saigaireki.qscpua2.com/hukuoka/> (2020年3月6日閲覧)
- 15) 松尾太・福島裕助・大賀康之 (1992) : 暴風枠利用による水稻台風被害の解析法. 日本作物学会九州支部会報, 59, 19-22.
- 16) 小西達男 (2010) : 1828年シーボルト台風(子年の大風)と高潮. 天気, 57-6, 15-30.
- 17) 都司嘉宣・日野貴之 (1993) : 寛政4年(1792) 島原半島眉山の崩壊に伴う有明海津波の熊本県側における被害, および沿岸遡上高. 東京大学地震研究所彙報, 68, 91-176.
- 18) 黒木貴一・磯望・杉村伸二 (2019) : 神社空間の奉納物材と自然災害の記録調査－筑後川下流域の一例. 九州応用地質学会令和元年度研究発表会論文集. 11-14.

参考ホームページ

- a) かわうそ@暦:こよみのページ. <http://koyomi8.com/> (2020年3月7日最終閲覧)
- b) 詞己:まめ辞典. <http://www.natubunko.net/mame01.html> (2020年3月7日最終閲覧)